



「釜ヶ崎オ！ペラ」本番ステージ

クパッカーが1日1000人もやって来るが、不当な働き方を強要された労働者の暴動の歴史や路上生活者の増加で、「行ってはいけない危険な場所」との偏見がまだ根強く残る。近年は、高齢化で生活保護受給者が急増し、まちの様相や課題もさま変わりした。生きがいや失い、過剰な飲酒で体調を崩したり、体力の衰えで引きこもるなど、社会とのつながりを絶たれる人も多い。

その釜ヶ崎に上田さんが活動拠点を構えたきっかけは、大阪市による隣町・新世界での巨大娯楽施設跡地活用事業が突然中止となり、そこに拠点のあったココールムも撤退を余儀なくされたことだった。「その時、これから世の中どうなっていくのかを一番聞いてみたかったのが、ご苦労されてきた釜ヶ崎のおちゃんたちでした。手がかり、生きる術、ヒントをたくさん持っているはずだと思っただんです」と上田さんは振り返る。

そして、釜ヶ崎でカフェを再開。過去5年間の経験から、さまざまな人々が集うカフェは、顕在化する前から社会の問題をキャッチし、メ

ディアや行政がすぐいきれない声が聴け、悩みを抱えた人もとにかくしゃべることが出来る。表現できる場として機能することを実感していた。

「社会包摂する側・される側の話になつたら包摂とは言えません。彼らの表現に、私がハッとさせられる。だから、生きてること、かわること、つっていいよね、と活動が続いてきてんです」（上田さん）

## 豊かにかかわりあって生きていく

釜ヶ崎で表現活動に取り組んで発見



釜ヶ崎芸術大学のひとコマ

は？との問いに、「人は齢を重ねても変わることができると教えてくれた。おじさんたちは人生経験豊富なので、引き出しが多いし、外国人やちょっとしんどい人など（異物）が入ってきて、受け止める力が高くて、場が温かいんです」と上田さん。

翌日、上田さんが担当する詩の講座に参加すると、果たしてその言葉通りだった。8名ほどの参加者が、出されたお題に対して、斬新な着想で言葉を操り出し、個性際立つ詩を次々と読み上げていく。笑いの突っ込みと鋭い批評も入る。異物である取材者も、前からの馴染みのように包み込んでくれた。あの場が、参加者の生きることの一部、社会や他者との接点になっている。

「表現の場づくり」は、これまで生きてきたことへ賛歌であり、豊かにかかわりあって生きていくことへの誘いを込めた応援歌なのだ、おじさんたちの目が語っていた。

特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋  
所在地：大阪市西成区山王  
設立年：2003年（法人認証2004年）  
職員数：5名（常勤3名） [www.cocoroom.org](http://www.cocoroom.org)